

我々の死者と 未来の他者

戦後日本人が失ったもの

大澤真幸

Ohsawa Masachi

はじめに

アメリカの政治学者エリカ・チェノウエスの推計によると、二一世紀の最初の二〇年間で起こった、非暴力抵抗キャンペーンの数は、二〇世紀の一〇〇年間に起こった数の合計よりも多かった。^{*1} 非暴力抵抗キャンペーン、すなわちチェノウエスが「市民的抵抗」と名づけた社会運動とは、政治的・社会的・経済的な現状を打破することを目的としてなされる、暴力には訴えない集団行動である。推計にあたっては、一〇〇人以上が参加した運動が市民的抵抗のケースとしてカウントされている。この種の集団行動の最もわかりやすい実例は、デモだが、ほかにもいくらかでも方法がある。ストライキ、不買運動、公開の討論会、等々。あるいはフラッシュモブを活用した示威活動などもこれに含まれる。ただし、「炎上」のようなネットの中にとどまる現象は含まない。

チェノウエスは、二〇一一年に出した本で、一九〇〇年からその時点までの世界中の政治運動についての膨大な歴史的データを収集し、分析した上で、常識に反する次のような仮説を提起し、人々を驚かせた。^{*2} 暴力的な政治運動よりも非暴力の運動の方が、成功率がずっと高い（後者の成功率が前者の二倍）。このことは、体制の転覆や政権の交替を求める革命的な運動の場

合でも成り立つ。そしてピーク時に人口の三・五％が参加する運動は——きわめて例外的なケースを別にすれば——、ほぼ確実に成功する。三・五％と聞くとごくわずかだという印象を与えるが、日本の人口で計算すれば四〇〇万人余りにあたるので、決して小さい数字ではない。日本くらいに人口規模の国では、四〇〇万人を動員するデモで何かを要求された政権は、その要求を全面的に受け入れるか、そうでなければ崩壊するほかない。

繰り返せば、非暴力の市民的抵抗の数が、二一世紀になってから急激に増えている。最初の二〇年間で、前世紀の一〇〇年分よりも多くの非暴力の抵抗運動が起きたのだ。これは、世界全体の総計である。スーダンやインドやブルキナファソ等のグローバル・サウスの運動も、香港での運動も、アメリカやヨーロッパなどの豊かな社会で起きた運動もすべて含まれる。「ウォール街を占拠せよ運動」も、「ブラック・ライヴズ・マター」も、「#MeToo」も、「LGBTQ」も、「黄色いベスト運動」も、この中に入っている。おそらく、二〇二〇年よりあとには、市民的抵抗の数と頻度はますます高まっているだろう。イランで起きた女性への抑圧（ヒジャブの強制）に反対するデモや、ウクライナ戦争・ガザ戦争に関連して世界各地で起きている抗議行動などが、入るからだ。

どうして、二一世紀に入ってから、市民的抵抗の数が急増しているのだろうか。我々の社会の「持続可能性」に対する不安が高まっているからに違いない。つまり、このままのやり方を

続けていけば、我々の社会が、さまざまな意味での破局に至るだろうという切迫した予感が、二一世紀に入ってから急速に広まっているのだ。予感されている破局の中には、気候変動による生態系の破綻、核戦争による人類の破滅、極端な格差やその他の差別による社会の不安定、監視による自由への脅威、等々が含まれる。

そうだとすると、市民的抵抗が世界各地で頻発し、その規模も大きくなっているということ、人類にとっては希望である。破局への趨勢^{すうせい}を止めるためには、市場のルールの外にある、さらには議会制民主主義の枠の中にさえ収まらない、（非暴力の）市民運動によるほかないからだ。

が、ここで、日本社会を振り返ってみよう。日本社会でも、二一世紀に入ってから、市民的抵抗と見なしうる運動が増えているだろうか。増えてはいない。日本で見られるのは、むしろまったく逆の傾向である。確かに、二〇一一年の原発事故の後には脱原発を求めるデモがあったし、二〇一五年には安保法制に反対する大規模なデモが見られた。しかし、全体としては、市民的抵抗と解釈できるキャンペーンは、日本では特段に増えてはいない。だが、今述べたように、世界全体で見れば、市民的抵抗の数は顕著に増えているのだ。日本だけが例外だということになる。

どうして、日本社会だけ、市民的抵抗が——他国に比べて——極端に少ないのか。日本社会

が、ほかのどの国よりもうまくいつているからなのか。もちろん、そんなことはない。そもそも、世界中の人々が不安な予感をもって見ている破局は、一国だけの問題ではなく、たいいていグローバルな問題であり、したがって日本社会もまたその犠牲者の一部である。そのことは日本人もよく知っている。それならば、どうして日本でだけ、そのような破局への歩みを自らの力で方向転換しようとする市民的抵抗がほとんど起きないのだろうか。タイトルからは予想しにくいかもしれないが、本書は、この疑問に答える試みで（も）ある。

*1 エリカ・チェノウエス『市民的抵抗——非暴力が社会を変える』小林綾子訳、白水社、二〇二二年。なお、この研究の、以下に述べるような日本にとつてのゆゆしき意義に関しては、私は、経営コンサルタントの山口周氏しゅうから教えられた。

*2 Erica Chenoweth and Maria J. Stephan, *Why Civil Resistance Works: The Strategic Logic of Nonviolent Conflict*, New York: Columbia University Press, 2011.

目次

はじめに

第1章

〈死者〉を欠いた国民

1 大正時代という設定?——『鬼滅の刃』

2 気候変動問題への日本人の極端な無関心

「環境問題に関心がありますか?」／日本人は無知なのか?／
多くの予兆が／徴としての奇蹟

3 〈未来の他者〉

現代の日本人に欠けているもの／問い／二重に不可解

4 利他性の限界

人間の利他性／遠くの見えない他者／もうひとつの「存在しない他者」

5 ナシヨナリズムと〈我々の死者〉

無名戦士の墓碑／〈我々の死者〉をもつこと／存在論的に未完成な共同体

第2章

トカトントン は 鳴り響く

- 6 日本人は〈我々の死者〉を失った
二種類の〈不在の他者〉の関係／現代日本人は〈我々の死者〉をもたない／
「おしん」／リアリズムに反する一点
- 7 二律背反と脱構築
回復と棄却の二律背反／第一の脱構築／第二の脱構築／『鬼滅の刃』は示している

- 1 トカトントンが聞こえてくる

小林正樹の違和感／「トカトントン」／「いったい、あの音は为什么呢」

- 2 仮に戦争に批判的であつたとしても

なぜその音は聞こえるのか／「この点を明確にして置きたい」／
自分は戦争を許容していた

- 3 戦後の追い風の中で書く／書かない

無頼派の中で太宰治だけが……／「戦後の追い風」を拒否する

第3章

二段階の哀悼——その意義と限界

1 二段階の哀悼

「敗戦後論」の孤立／まず「日本の死者」を、ついで「アジアの犠牲者」を／
謝罪Ⅱ哀悼／解決したのか

2 赦されえないがゆえに……

赦しえないものを赦す／悪から善への化学変化はどこで生ずるのか／
救済者がいないとすれば……

4 〈戦争の死者〉の呼びかけを承けて

アツ玉砕の一人／「死んで下さい」

5 事前の視点／事後の視点

〈戦争の死者〉と無関係に……？／事前の視点と事後の視点／
馬の背中に狐が乗っている

6 トカトントン は鳴り続いてきた

未帰還の友は呼びかけない／戦後の通奏低音としてのトカトントン

第4章

仮象としての大衆

1 鶴見俊輔——国家に抗する「私」

二人の戦後思想家／絶望すべきだった……／「私」の中の「普遍人」

2 吉本隆明——大衆の「仮象」

大衆の定義／「鋼鉄の武器を失へる時」／二種類の転向／
庶民からの罵倒に応えて？／超越論的仮象としての大衆

3 井の中の蛙は井の中にいて……

あえて日本に帰国した／ここを攻撃するアメリカの飛行機は友なのか？／
井の中の蛙

第5章

青みどろだけがいた

1 先祖の話

無縁ぼとけの列に疎外しておくわけにはいかない／
あの隅あたりで見たり、聴いたりしている者／柳田國男の試みは失敗だった

第6章

スロウ・ボートは中国に着いたか

2 〈死者〉たちの列伝

歴史観をつくった司馬遼太郎／司馬遼太郎の創作動機／
我々の死者たちの列伝／青みどろの異胎

3 虹色のユートピア

〈真実〉はフィクションの構造をもつ／あれは我々ではない／
実在しない都市で／関東軍と戦う「日本人」

1 中国行きのボートは遅い

失踪した妻を捜す物語の中に／父の回想／三人の中国人／中国はあまりに遠い

2 現在の闘争と満洲での戦争

現在の政治的闘争／満洲での戦争／記憶を奪う者

3 「井戸」の二つの抜け道

「井戸」と「壁抜け」／それ以前の「壁抜け」／「世界の終り」と歴史の〈現実〉／
政治的闘争に対する二つの態度

4 処刑のヴァリエーション

三つの処刑／過去の複数性

5 あまりに凄惨な……

あらかじめの罰／皮剥ぎ／見ることの可能性と不可能性の葛藤

6 量子論的重ね合わせのように……

重ね合わせ／壁抜けの二つの方向／物自体を見る

7 〈我々の死者〉を救い出す

「起きるべくして起きた」のだが……／必然性の遡及的な構成／
未来を変えることと過去を見出すこと

開かれた結び

課題の再確認／〈未来〉への変革と〈我々の死者〉の発見／

あの男は〈我々の死者〉にはなりきれなかった／

〈我々の死者〉を失ったところから始めることの反復／

クリティカルな機会は常にある

第1章 〈死者〉を欠いた国民

1 「大正時代」という設定?——『鬼滅の刃』

『鬼滅の刃』(吾峠呼世晴)についての小さな疑問を記すことから始めよう。このマンガはどのようにして「大正時代」という設定をもつのか。疑問の核は、次のことにある。

大正時代という設定は、このマンガの魅力、感動のポイントとはまったく関係していない。主人公の竈門炭治郎は、鬼殺隊という秘密の保安隊・警察のようなものに参加する運びとなる。この世界には、人間を喰う鬼が跋扈している。しかし普通の人はそのことをまったく知らない。つまり我々の社会は、これ以上ないほど端的に恐ろしい敵の侵入をすでに許してしまっているのだが、そのことを自覚してはいないのである。鬼殺隊は、その敵である鬼と闘い、鬼を殺すために選ばれた者たちで編成されている。炭治郎も、偶発的な経緯により、そしてまたこの使命にふさわしい能力と性格をもっていたがゆえに、鬼殺隊の一員に加わり活動する。

このように、『鬼滅の刃』は純粋なファンタジー、純粋な虚構である。現実には存在しない鬼たちがいると仮定し、彼らと人間との死闘を描く。この物語は、現実の具体的な場所や時代を背景とする必要はない。同じように、人間の肉を喰う敵と闘う『進撃の巨人』(諫山創)と対比してみるとよい。このマンガは、『風の谷のナウシカ』(宮崎駿)と同じように、何か破局

的な出来事があつたあとの未来のことではないかと漠然と想像させはするが、實在の具体的な場所や出来事とのつながりをもたない。

『鬼滅の刃』も、これらと同じように、現実の時代や場所と無縁であつてかまわないように思える。あるいは、作者の固有名や風俗への趣味を活かすとすれば、「少し昔の日本」といった程度のあいまいさで十分だったように思える。実のところ、難解な漢字を駆使した独特の名前への愛着からだけでも、この作品の中では、現実から虚構の空間へと遊離しようとするベクトルと、逆に現実へと着地しようとするベクトルの両方がともに強く働いていて、二つのベクトルが均衡しているということを読み取ることができるのだが、今は、そうした精度の高い分析をするときではない。いずれにせよ、『鬼滅の刃』の主題にとって、「大正」という、日本の歴史上の特定の時代を背景として指定しなくてはならない必然性はないように見える。実際、マンガの中に大正時代の具体的な出来事や人物はまったく登場しない。大正デモクラシーも米騒動も三・一運動も関東大震災もマンガには現れず、大正時代という背景はほとんど効いていないという印象を与える。

それならば、どうして『鬼滅の刃』は、「大正時代」という具体的な期間を、自らの舞台として要求しているのだろうか。この作品の芸術性とは無関係な、ささいな疑問をここに銘記しておく。この疑問には、あとで立ち返る。

本来の問いを提起しよう。

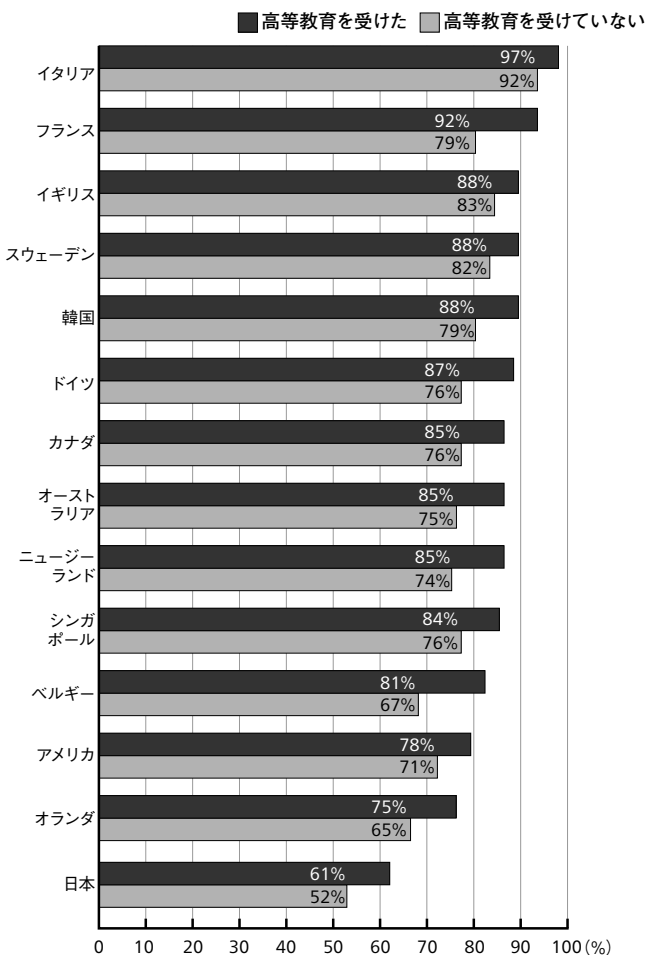
2 気候変動問題への日本人の極端な無関心

「環境問題に関心がありますか？」

日本人の、環境問題・気候変動問題に対する関心は非常に低い。日本と同じ程度に経済的に豊かで、民主的な政治体制をもつ他国——そのほとんどは欧米のいわゆる「先進国」（グローバル・ノース）——ということになるが——と比べると、日本人のこれらの問題への関心は、著しく低い。このことは、繰り返し指摘されてきた。

日本人も、気候変動問題の深刻さについての知識はもっている。たとえば、二一〇〇年までの世界全体の平均気温の上昇を、産業革命前の気温を基準にして摂氏一・五度未満に抑えないと、以前の状態には戻ることができなくなる（いわゆる point of no return を越えてしまふ）、それなのにすでに一度を超える——いや（二〇二三年にはすでに）一・三度程度の——気温上昇が生じてしまっていること、などは多くの日本人にも知られていることだ。しかし、環境破壊や気候変動に対して、何らかの対策をとらなくてはならないという切迫した意識は、日本人の間では広く共有されてはいない。

図1-1 気候変動対策への意欲と教育の関係



気候変動の影響を軽減するために「行動を変えよう」とする意欲は、
教育と結びついている。

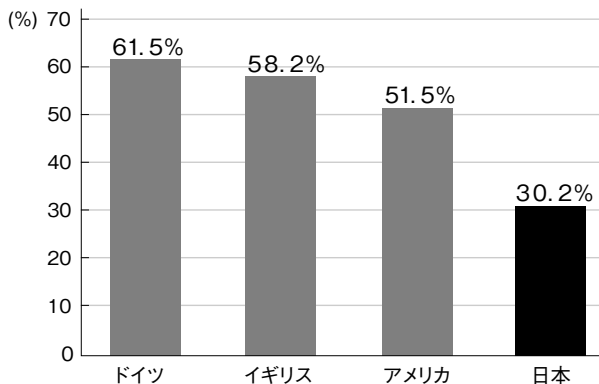
出典: Spring 2021 Global Attitudes Survey. Q32. "In Response to Climate Change, Citizen in Advanced Economies Are Willing to Alter How They Live and Work" Pew Research Center.

このことは、多くの事実から確認することができる。たとえば日本企業が、再生可能エネルギー等の気候変動対策につながることに投資している額は、欧米の企業に比べて著しく少ない。日本の投資家の間では、ESG投資（環境・社会貢献・企業統治への配慮のある企業への投資）もさして普及していない。

ここでは、ごくシンプルな調査結果だけを見ておこう。アメリカのピュー・リサーチ・センタ^{*1}が二〇二一年春に実施した国際比較の意識調査を紹介しよう。図1-1は、気候変動の影響をできるだけ小さくするために、自分たちの行動を変えなければならないという意欲をもっている人の比率を、国別に示したものである。このグラフは、高等教育を受けた人とそうでない人とで、意欲に違いがあるかを見ることを目的としており、調査対象となっているすべての国で、前者の方が意欲が大きいことが示されているのだが、今は、教育のことは脇に置いておこう。一四カ国の中で、日本人が、気候変動への対策として行動を変えようとする意欲が最も小さいことがわかる。日本でも、高等教育を受けている人の方が、行動を変化させようとする人の率が高いことは高いが、その比率は、他の一三カ国の「高等教育を受けていない人」の比率よりも低い。要するに、日本人で環境問題に関心をもっている者の率は、他の「先進国」と比べて著しく低い（図1-1）。

同じ傾向は、調査対象を若者に限ったときにも認められる。日本財団が、一八歳（厳密には

図1-2 18歳の若者が「気候変動対策」を
「解決したい社会課題」に選んだ割合



出典：日本財団 第20回「18歳意識調査(2019年)」

https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/11/wha_pro_eig_97.pdf

一七（一九歳）の若者を対象に、二〇一九年に実施した国際比較調査を引いてみよう。^{*2}「社会や国に対する意識調査」というタイトルをもつこの調査の中に、「あなたが解決したいと思っている社会課題は何ですか」という質問がある（複数回答可）。調査は、九カ国を対象とするものだが、中国やインドなどのアジア諸国を抜き、経済的水準や政治制度において、日本とある程度近いと見なすことができる欧米の三カ国（アメリカ、イギリス、ドイツ）について、この質問への回答を調べてみよう。三カ国では、一八歳の若者の「解決したい社会課題」の最上位（一位か二位）に、「気候変動対策」が入っている。だいたい、五割から六割強の者が、これを選択している。では、日本の一八歳の若者はどうか。彼らの

「解決したい社会課題」の上位五位の中には、「気候変動対策」は入っていない。「気候変動対策」を選んだ日本の一八歳は、およそ三〇%で、やはり他の「先進国」に比して目立って低い^{*3}（図1・2）。日本の若者からは、グレタ・トゥーンベリのような人は出てきそうもない。

日本人は無知なのか？

どうして、日本人は、他の国々の人々と比べて、環境問題や気候変動問題に対して強い関心を示さないのか。確かに、多少の関心をもっていたとしても、今、各国でなされている対策程度では、たとえば風力発電などの再生可能エネルギーの比率を増やしたり、電気自動車に切り替えたりといったことくらいでは、とうてい破局へと向かう気候変動は止められない、という説もある^{*4}。その説は、実際、たいへん説得力がある。しかし、それでも、「今なされている程度」の対策もなされないようでは、それを超えるより徹底した変革などとうてい望めない。

だから、もう一度、問おう。どうして、環境問題や気候変動問題に対する日本人の関心は著しく低いのか。日本人の知識が足りないことに原因があるのだろうか。多分、そうではない。もし日本人の知識が不足しているのだとしたら、因果関係は逆である。関心がないために、知識が普及しないのだ。

そう考える根拠は、日本の初等・中等教育における「理科」の成績の国際的な高さである。

環境問題・気候変動問題に最も関連の深い学校の科目は理科だろう。国際教育到達度評価学会による「国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS)」によると、一九九五年以来の四年ごとの調査で、常に、日本の小学生・中学生の理科の成績は、上位にあった。たとえば二〇一九年の調査では、日本の中学二年生の理科の成績は、三九カ国中第三位で、欧米のどの国よりも高い。

だから、日本人は自然科学に関して標準以上の知識をもちながら、今や、多くの科学者が警鐘を鳴らし、ほとんど通説になろうとしている地球生態系の差し迫った破壊に対して、危機感をもつことができずにいるのだ。さらに問わざるをえない。どうしてだろうか。

多くの予兆が

気候変動問題への関心が世界中で急速に高まっているのは、近年、これまでではほとんど考えられなかったような異常気象や大規模災害が次々と起きているからである。春先から始まるような極端な猛暑とか、大規模な山火事の頻発とか、バツタの大量発生とか……。こうしたことは、誰にでも実感できるので、それらを引き起こす基底的な原因として地球温暖化などの気候変動が起きているという学説を信じる手がかりとなる。

さて、そうだとすると、日本列島の気候は穏やかで、異常気象や天変地異が起きにくいのだろうか。そのため、日本人には、気候変動への鬼気迫る実感がわかないのだろうか。だが、日

本列島もまた、極端な異常気象に見舞われていることは、この列島に住む誰もが知っている。近年の夏の猛暑は凄まじく、超大型の台風や激しい集中豪雨にも襲われている。「観測史上最大」と形容される暴風雨など、極端な気象現象が、毎月のように連続することがある。そもそも、新型コロナウイルス感染症のパンデミックもまた、気候変動を引き起こすような「人間と自然環境との関係の変化」に起因しているとの説が有力であり、日本人もまた、当然のことながら、このパンデミックに苦しめられている^{*5}。

つまり、日本人もまた、これまでであればとうてい起きそうもない極端な異常気象や自然災害を経験している。だから、ますますふしぎである。どうして、日本人は気候変動の危機に對してひどく鈍感なのか。

徴としての奇蹟

ここで連想されるのは、新約聖書の福音書に記された、イエス・キリストによる数々の奇蹟である。イエスの奇蹟と気候問題との間にどんな関係があるというのか。

福音書によれば、イエスは、さまざまな奇蹟を引き起こす。水をぶどう酒に変えたり、死者を復活させたり、盲人の目を開かせたり、水上を歩いたり……。なぜイエスは奇蹟を起こしてみせたのか。彼は、人々を驚かせたかったわけではない。もちろん自己顕示からそんなことを

したわけでもない。では奇蹟は何のためだったのか。

キリストの福音（よい知らせ）とは、要するに、「神の国は近づいた」ということだ。神の国は、もう目前にまで迫っている。ほとんど、すでに神の国に到達してしまっている……と言わんばかりである。だから、すぐに悔い改めなくてはならない、と。だが、いくら、「神の国は近づいている」と大声で叫んだところで、人は、かたんに納得し、それを信じることができないわけではない。ではどうするのか。だから奇蹟を引き起こすのだ。

これほどの奇蹟が起きるのだとすれば、神の国はほんとうに迫っているに違いない。奇蹟を起こしているこの人は、神の子であるに違いない。人は、そのように信じることになるだろう。奇蹟とは、来るべき神の国の予兆であり、その「徴」だ。

では、イエスをキリスト（救世主）として信じなかった者たち、「神の国は近づいた」という福音を受け取らなかった者たち、最後にはキリストを殺害してしまった者たちは、奇蹟を見ていなかったのか。彼らは、奇蹟の現場に一度も立ち会うことがなかったために、信じることができなかったのか。ここが肝心なところである。彼らは、必ずしも、奇蹟を見ていなかった、というわけではないのだ。彼らもしばしばイエスが奇蹟を引き起こすのを目撃していた。

たとえば、イエスが、ラザロを復活させたとき。ラザロが死んでから四日も経過しており、その遺体はすでに墓に入れられ、死臭を発していると思われる。だが、イエスが大声で「ラザ

口、外へ出てきなさい」と叫ぶと、死者は包帯で巻かれたままの姿で出てきた。それを見たユダヤ人たちは驚き、多くはキリストを信じた。だが、全員ではない。目撃者の中の一部は、その場を立ち去り、イエスに対して憎悪や敵意を抱いていたファリサイ派の人々にこの奇蹟のことを告げ口した。ファリサイ派の人々がイエス殺害のための協議を始めたのは、この直後である。

要するに、奇蹟を見たり、知ったりしても、それを神の国の徴として受け取ることができるとは限らない。ある人にとって奇蹟が徴になるのは、奇蹟を見たり、知ったりする前に、その人に、「徴に対するにふさわしい態度」が形成されていなくてはならない。奇蹟を見たから信ずるわけではないのだ。真実は逆である。イエスを信じているからこそ、奇蹟を徴として見ることができなのだ。「知」に「信」が先行している。

何を言いたいのか。日本人は、ラザロの復活という奇蹟を目撃しながら、そこに徴を認識することができなかった者たちのようなものだ。日本人もまた、「奇蹟」に立ち会っている。奇蹟とは、尋常ならざる異常気象、これまでの常識の中ではとうてい予想できなかったような自然災害などである。これらは、徴かもしれない。何の？ 生態系の破局の、である。しかし、イエスの奇蹟のときのように、それを徴であると認識できるためには、ふさわしい態度が準備されていなくてはならない。日本人には、どうやら、その態度が欠けているようだ。イエスの

奇蹟に関しては、必要な態度とは、イエス・キリストへの信仰であった。では、環境問題・気候変動問題では、何がそれにあたるのか。

3 〈未来の他者〉

現代の日本人に欠けているもの

気候変動に伴う生態系の破局は、まだ起きてはいない。それは差し迫っている。が、しかし、真の破局が到来し、深刻な被害が目に見えるものになるのは、たとえば海拔の低い低地や島々が水没してしまうのは、これからである。温暖化に伴う被害を語るとき、主として念頭に置かれているのは、二一世紀の後半・終盤、とりわけ二一〇〇年頃である。二一〇〇年に、地球の平均気温はどのくらいになっているだろうか、そのときには……といった具合に、である。

二一〇〇年であれば、現在生きている我々の大半は、死んでいる。温室効果ガスを排出する人間の活動に起因する気候変動の主たる被害者は、現在の我々ではなく、我々が死んだあとにやってくる〈未来の他者〉、将来世代である。ここから、どうして日本人は環境問題・気候変動問題に無関心なのか、という問いへの暫定的な答えを導くことができる。日本人は、〈未来の他者〉にほとんどコミットしてはいないのだ。自分たちの死後を生きる〈未来の他者〉たち、

将来世代が繁栄し、幸福を享受することができらるだろうか、ということについての配慮が、現在の日本人には大きく欠落している。

ひどい異常気象や自然災害を「徴」として受け取るための態度が、日本人には欠けているように見える、と述べてきたわけだが、その欠落している態度とは、〈未来の他者〉に応答しようとする構えである。こうした構えがないとき、どんな異常気象でも、それは今の被害の問題でしかなく、何か特別なことを示す徴ではない。^{*6}

先に、日本以外の「豊かな国」の若者は、解決したい喫緊の社会課題として「気候変動対策」を最上位に挙げる、と述べた。気候変動問題への対処を優先させるのは、それが、一部の人の利害や不幸ではなく、人類全体の困難に、いや地球全体の危機に関連しているからだ。しかし、そのように考えるためには、〈未来の他者〉の視点で問題を見なくてはならない。現在の我々にとってはまだ、それは危機として立ち現れていないからだ。逆に言えば、〈未来の他者〉の視点がないとき、気候変動問題の優先度は下がってくる。それは、年金改革や消費税率や景気対策よりも、小さな問題になるだろう。日本の若者が、そうしたケースにあたる。

問い

本書を通じて探究したい主題は、気候変動問題そのものではなく、そうした問題への日本人

の無関心を規定している態度である。どうして、日本人は、ことのほか〈未来の他者〉への配慮を欠いているのか。〈未来の他者〉に応答しようとする構えが、日本人においてとりわけ欠けているのはどうしてなのか。その原因はどこにあるのか。

気候変動問題への意識は、この点を顕在化させる最もわかりやすい指標である。しかし、問題の深度や重要度を理解する上で、〈未来の他者〉の視点を媒介にしなくてはならない困難は、気候変動だけではない。というより、現在の主要な問題のほとんどすべてに関して、その真の被害者は、我々の死後の世代、いまだに生まれてはいない他者たちである。

たとえば国連は、SDGs（持続可能な開発目標）と称して一七個の課題を挙げ、さらにそれらを細目に分けているが、これらの課題を克服できなかったときの被害者、これらの課題を乗り越えたときの受益者は、主に〈未来の他者〉である。SDGsが言及している諸問題、貧困や格差にせよ、飢餓にせよ、ジェンダーの不平等にせよ、海や陸の豊かさにせよ、すでに十分に深刻なものになっていることばかりだが、これらがとりわけ心配されているのは、問題が放置されたときに、二一世紀の後半には破壊的な結果につながるだろうと予測されるからだ。

〈未来の他者〉に応答しようとする構えが、何らかの原因によって日本人にとりわけ欠落しているのだとすれば、我々日本人は、これを克服しなくてはならない。ほんとうは、〈未来の他者〉への応答という点で困難を抱えているのは、日本人だけではない。現代の人類にとって共

通の難題ではある。しかし、ここまで見てきたように、日本人において、困難の度合いがとりわけ深いことも確かである。どうしたら、これを克服することができるのか。

二重に不可解

カントは、「世界公民的見地における一般史の構想」という文章の中で、「不可解な謎」として、次のような趣旨のことを述べている。^{*7}人間はしばしば、その成果として得られる幸福を享受できるのがずつと後世の世代であつて、自分自身ではないということがわかつているような骨が折れる仕事でも、営々と従事する、と。人間が、自分の幸福や快樂のために生きていゝとすれば、これは奇妙なことである。しかしたいの人は、自らを振り返ってみれば、確かにこの奇妙なこと、不可解なことをやっている。たとえば、自分の退職が迫つていても、我々は、さして手を抜くことなく熱心に仕事をして、自分が去つたあとでも会社に残っている人、これから入社してくる人のために、がんばるだろう。

だが、ここまでの考察で確認してきたことは、カントの言う「不可解な謎」が、現代の日本人を集合的に見たときには、確かに実際に稀な^{まれ}ことになっているということだ。カントは、不可解で奇妙ではあるが、こうしたことは普通に見られることであると論じている。しかし、現代の日本人に關して言えば、それは普通のことではない。現代の日本人は、自分が享受するわ

けではない幸福のために特に努力したいとは思っていない……ように見える。

カントが、後世の世代の幸福のためだけに骨折り仕事するのは不可解なことだと述べているくらいだから、現代日本人のこうした傾向は——自分が享受するわけではない幸福のためには努力はしないという傾向は——、ある意味では、自然なこととも言える。しかし、日本人にだけ、特にそういう傾向が強いのだとすれば、やはりふしぎなことだ。カントが「不可解な謎」と見なした行動が、日本人においてはあまり見られないのだとすれば、それもまた不可解なのだ。不可解さは二重化していることになる*₈。

4 利他性の限界

人間の利他性

人間は利己的な動物である。だから、他者のために——他者の幸福や利益のために——自分の幸福や利益を犠牲にすることには、少なからぬ困難が伴う。このような主張に、一定の真実が含まれていることは、誰もが知っている。

が、しかし、他の動物と比較した場合の人間の特徴は、むしろ、利他的性向が非常に強いことにある。社会性の昆虫（アリやハチ）のようなケースを別にすれば、人間の個体は、ずば抜

けて利他的である。

たとえば、道に迷っていそうな人を見かければ、自分には特に利益がなくても、たいていの人は、その迷い人を助け、正しい道順を教えてやるだろう。カントの「不可解な謎」が、ここでも実は小さな規模で生じている。自分の幸福にはまったくつながらないことに骨を折っているのだから。人間にとつての最近縁種であるチンパンジーの個体も、困っている他個体を援助することは、実験によって確認されているが、しかし、人間に比べるとずっと消極的である（チンパンジーは強く要請されないと、めったに助けてやらない）。人間は、積極的に食べ物を分け合うが、チンパンジーの分配行動はきわめて稀で、かつ非常に消極的である。

人間の個体は、（一定の範囲で）他者が自分のために何かをしてくれることを当然の前提としており、その前提は、実際に、かなり高い確率で満たされている。たとえば、あなたが何か探しものをしているとき、誰かが箱を指差したとする。あなたは即座に、箱を開けてみるだろう。他者があなたに有用な情報を——その他者にとっては特段の利益がなくても——提供してくれるのを、当然だと思っているからである。人間の場合、言語習得前の赤ちゃんでさえも、他者の指差しに対して、このように反応する。しかし同じことをチンパンジーにやっても、決して、チンパンジーは箱を調べたりはしない。チンパンジーは、他の個体が、自分に有利なことを教えてくれるという期待をまったくもっていないからだ。

このように、たいていの人間は困っている人、苦しんでいる人を——一定の限度内ではあるが——助けようとする。困っている人を前にして、これを完全に無視する方が、むしろ苦痛でさえある。

遠くの見えない他者

とはいえ、このような利他性が発揮されるのは、他者が近くにいて、その存在を実感できるときである。遠い他者、見えない他者に対しては、そのような自然な利他性は発揮されない。このことが、南北間の——グローバル・ノースとグローバル・サウス間の——搾取や格差の原因にもなっている。北側の「先進国」の人々は、「良心の痛み」を感じることなく、南側を搾取することができる。

いわゆる「オランダの誤謬」^{（ごびょう）}も、こうした文脈で生ずる。「オランダの誤謬」とは、次のようなことを指す。オランダのような先進国は、二酸化炭素の排出量をゼロにして、しかも快適な環境を作ることができる。実は、それは、二酸化炭素を排出せざるをえない諸活動をすべてグローバル・サウスの方に外部化しているからだ。しかし、オランダ人は、それに気づかず、自分たちは、クリーンな環境を実現できていると思ってしまう。

ウォーラステインの「近代世界システム論」は、地球規模の階級的な搾取を分析するもの

だった、と解釈することができ。マルクスは、階級の間の搾取と闘争を、資本主義社会のダイナミズムを決定する基底要因と見なしていた。しかし、二〇世紀になってからは、「先進国」では、深刻な階級の対立はなくなつたかのように言われた。しかし、階級の格差は、世界システムの全体の中で見れば、まったく消えてはいない。それを証明したのが、近代世界システム論である。

だが、二一世紀になってから「格差（不平等）」が、各国で——グローバル・ノースの各国で——あらためて、大きな社会問題と見なされるようになった。それは、グローバル・サウスへと外部化されていた搾取が、グローバル・ノースに逆輸入されてきたからだ。かつては、遠くに見えない他者たちを搾取していたのだが、もはや、彼らは搾取しきれなくなつた。先進国の資本は、その分を、身近な他者の搾取によつて補おうとしたのだ。^{*9}このとき、不十分ながら、あらためて「格差」が主題化され、告発の対象となつた。人は、見えている他者の痛みを放置することは難しい。

もうひとつの「存在しない他者」

さて、我々の論題は、〈未来の他者〉であつた。日本人は、〈未来の他者〉への配慮が、顕著に小さいように思われる。それはどうしてなのか。

いま述べたように、同時代的に同じ地球にいたとしても、遠く離れているがために見えない他者に対しては、人は一般に鈍感になる。そうした場合、人間の生来の利他性も発揮されない。まして、その相手が、〈未来の他者〉だったらどうなのか。〈未来の他者〉は、豊かな国の人々にとって、グローバル・サウスの人々よりも遠い他者である。それは、無限に遠い他者であると言うことさえできる。〈未来の他者〉は、存在すらしていないのだから。

だが、もう一度確認しよう。〈未来の他者〉への応答がとりわけ弱いのは現代の日本人である。他国の市民は、日本人よりも、〈未来の他者〉に対しては敏感に反応しているように見える。この違いには、何かはつきりとした原因があるはずだ。

繰り返し返そう。〈未来の他者〉は存在しない。存在しない他者に応答することなど、原理的に不可能に見える、とそう示唆した。だが、ここで考えてみよう。存在しない他者は、〈未来の他者〉、将来世代だけではない。もう一種類、存在しない他者がある。過去の他者、すでに死んでしまった他者たちである。

同じ存在しない他者であっても、過去の世代に属する他者に対しては、人はしばしば敏感に反応する。「いまだ存在しない他者」と「すでに存在しない他者」。実在の否定の度合いに関しては、確かに前者の方がより徹底している。「すでに存在しない」他者は、「かつて存在した」他者でもあるからだ。しかし、いずれにせよ、人はしばしば、〈過去の他者〉の要求には応え

よい、とい、その拘束力は、ときには、同時代的に共存している他者たちからのそれよりも強い。たとえば、父や母の遺志に従うときのことを考えてみるとよい。亡くなった両親の期待を裏切ることは、生きている人との約束を違^{たが}えるよりも、ときに辛^{つら}く、重い罪の感覚をもたらずだらう。

したがって、とりあえずは、こう結論することができ。『いま一緒に存在しない』ということは、その他者への関わりを必ずしも不可能なものにするわけではない、と。そう考えれば、《未来の他者》に応答することの困難という問題に対しても、わずかな希望が見えてくるだろう。少なくとも《過去の他者》に対しては、我々はときに積極的に対応する。それならば、《未来の他者》であっても……。

5 ナシヨナリズムと《我々の死者》

無名戦士の墓碑

ベネディクト・アンダーソンは、今やナシヨナリズム研究の古典となったあの有名な著書の冒頭近くの箇所で、次のように述べている。

無名戦士の墓と碑、これほど近代文化としてのナショナリズムを見事に表象するものはない。これらの記念碑は、故意にからっぽであるか、あるいはそこにだれがねむっているのかだれも知らない。そしてまさにその故に、これらの碑には、公共的、儀礼的敬意が払われる。これはかつてまったく例のないことであつた。(中略)これらの墓には、だれと特定しうる死骸や不死の魂こそないとはいへ、やはり鬼気せまる国民的想像力が満ちて^{*10}いる。

ここでアンダーソンは、ネーション(国民)やナショナリズムは、近代的な現象であり、それ以前にはなかったということを示そうとして、このようなことを論じている。ネーションとナショナリズムは、かなり早いところで、一八世紀後半から一九世紀前半に、多くの地域では、一九世紀の終わりから二〇世紀に次々と誕生した。

アンダーソンが述べていることは、無名の戦士、つまり匿名^{とくめい}のままに葬られた死者に敬意が払われるということは、近代以前にはまったく考えられなかったということだ。無名戦士の墓碑は、ナショナリズムが実際に働いていることの指標になる。そのことが同時に、ナショナリズムがいかに近代的なものであるかの証明にもなっている、というのがアンダーソンの主張だ。

我々の死者と未来の他者

戦後日本人が失ったもの

大澤真幸

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：1,034円 (10%税込)

発売日：2024 年 4 月 5 日

ISBN：978-4-7976-8137-6

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)